7. 基礎現代文化学系

基礎現代文化学系は，科学哲学科学史専修，メディア文化学専修，現代史学専修の 3 つから構成されている。

科学哲学科学史専修は，「科学とは何だろうか」という問いに，主に哲学と科学史の 2 つの分野の手法を用いつつ答えることを目指している。科学哲学は哲学の伝統的な問題意識を科学に当てはめたり，科学の営みの中で生じる概念的問題を考察したりすることでこの問いに迫る。科学史は科学の学説史や科学・技術をめぐる社会史などを検討することで科学の成り立ちを考える。この両者が組み合わさる学際的なアプローチが当専修の特徴である。

メディア文化学専修は，現代におけるメディアの高速化・大規模化・廉価化・大衆化・グローバル化により生み出された，国や地域を超えた新たな文化・価値観・生活様式にかかわるさまざまな問題を考察する。本専修の教育の大きな特徴は、従来の人文・社会科学の手法に基づきつつ、新しい事象を扱うためにこれまでになかった分析視点や他分野の手法なども積極的に採り入れる点にある。

現代史学専修は，旧史学科の現代史学講座として設置され，一次史料の分析に基づく歴史学の方法論をとる。一方で，様々な国や地域の間の様々な影響関係を考察することなくして現代という時代を把握することは出来ないという視点に立ち，現代史を世界史として把握することを目指している。したがって，日本を含む特定の国の歴史を分析する場合にも，常に世界史的な位置づけや相関関係を考察することが求められる。

各専修は，1 回生から受講できる入門的な内容の系共通科目講義を提供している。また，基礎現代文化学系全体では，基礎現代文化学系ゼミナール（現代文化学系の大学院修了者によるリレー講義）を開講している。各専修の専門科目である講読・特殊講義・演習・基礎演習の中には，2 回生から履修できる科目もある。1・2 回生のうちにこれらを受講して，各専修の研究内容を知ってほしい。また，専修分属後に専門的な研究を進めるためには，系共通科目の講読を 2 回生から 3 回生の間に履修しておくのが望ましい。分属希望者が専修の収容人員を上回った場合には，各専修が 1・2 回生の時の成績等によって選考を行うことがある。

■ 科学哲学科学史専修

教　授　伊勢田　哲　治　科学哲学，社会認識論，検証理論，科学実在論，社会科学の哲学，認識論，科学技術倫理
准教授　伊藤　憲二　科学技術史，知識のグローバル・ヒストリー

〔著書･論文〕伊勢田『認識論を社会化する』(名大出版会　2004)，同『疑似科学と科学の哲学』(名大出版会　2003)，『科学哲学の源流をたどる』（ミネルヴァ書房, 2018），伊勢田ほか編『科学技術をよく考える』(名大出版会 2013)

伊藤 『励起：仁科芳雄と日本の現代物理学』（みすず書房 2023 年 7 月出版予定）；“Transnational Scientific Advising: Occupied Japan, the United States National Academy of Sciences,” *The British Journal for the History of Science,* online, 2023: 1-15; “Early Japanese Reactions to the Interpretation of Quantum Mechanics, 1927-1943,” pp. 687-707, in Olival Freire, Jr. ed, *Oxford Handbook of the History of Quantum Interpretations* (Oxford University Press, 2022); “The Scientific Object and Material Diplomacy: The Shipment of Radioisotopes from the United States to Japan in 1950,” *Centaurus* 63(2), 2021: 296-319.

現代社会が高度科学技術社会と特徴づけられるように，科学は現代の社会のみならず文化の基底を構成しており，その理解は，専門家のみならず，非専門家にとっても非常に重要な課題である。しかし現代科学が高度な専門化している結果，各分野の専門家は，非常に細分化された研究に携わっており，そのために専門家には科学の全体像はむしろ洞察しづらくなっている。本専修では，「科学とは何だろうか」という問いに哲学や歴史学といった人文社会系の学問の視点から答えることを目指す。

現代の科学哲学の研究対象は科学そのものと同じほど多様であるが，その中心となるのは，「科学的説明」，「仮説の確証」，「科学的実在論」，「科学の転換」といったテーマである。しかし数学の哲学，物理学の哲学，生物学の哲学，あるいは社会科学の哲学というように，ある程度研究分野を限定し，その分野での専門的な研究内容に即した哲学的問題を取り扱うこともできる(たとえば，相対性理論における時間と空間の概念，量子力学における因果性，生物学的種の概念，階級の実在性のように)。また論理学と数学の基礎，確率と統計の哲学，心の哲学といった重要な分野もある。いずれのテーマを研究するにしても，そのために必要なのは，問題把握のセンス，論理的な分析能力と，選んだ研究テーマに関して具体的な専門知識を掘り下げていく根気である。また科学的営みや知識を分析対象とする以上，科学に関する具体的知識を欠いた研究は不毛であるといえよう。

科学史研究は，さまざまな地域・時代における知識生産の歴史学的研究を通して，科学と呼ばれる知識実践が立ち現わる過程を明らかにし，科学についての理解を深める学問である。知識実践は個人の脳内で完了するものではなく，分散化されたな認知を含む社会的な営みであり，そこでは人間とその集団だけでなく，認識の対象やその環境，認知のための物質的・社会的装置など人間以外のアクターも作動する。様々な知識実践のうち，あるものが科学として境界が設定されるのも，これらのアクターの織り成す社会的・歴史的過程である。また，科学と密接に関連する「自然」，「事実」，「正常性」，「客観性」，「科学者」なども同様に歴史的過程をへて分節化され，制度化される。科学史はこの過程を理解することを目指すが、そのためには知識内容に加え，具体的な知識実践とその実践者，その文化やインフラストラクチャー，それらが正当化され，伝播されたり，されなかったりする社会的な仕組み，そしてその歴史的な発展のメカニズムも研究の対象となる。また普遍性を標榜し，志向し続ける科学を考える上で，西洋中心主義・男性中心主義にとらわれないグローバルな視点やジェンダー観点も欠かせない。このように科学史の研究は豊富な内容を持ち，分野を越えた複数の学問的方法の組み合わせによって実践されているため，様々な素養を生かした多様なテーマ設定が可能であり，多様な知的関心にこたえることができる。

近年では科学哲学･科学史は「科学技術社会論」(STS)と呼ばれる，より広い学際的分野の一部と見なされることが多くなってきた。STS では，社会学や心理学などの研究手法も用いられ，また研究対象も狭い意味の科学に限らず，技術に分類されるものや，科学と社会の接点において生じる問題なども対象となる。本専修の軸足は(特に大学院においては)あくまで科学哲学と科学史にあるものの，学部レベルでは，STS も含めた広い意味で「科学とは何だろうか」という問いにアプローチする研究も歓迎する。

本専修の卒業論文のリストは専修ウェブサイトで公開しているので参照されたい。

https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/philosophy_and_history_of_science/phs-student-gradtheses/

■ メディア文化学専修

教　授　　喜　多　千　草　　コンピューティング史，現代技術文化史，現代文化学

准教授　　松　永　伸　司　　分析美学，ゲーム研究，現代文化学

教　授(兼)　ミツヨ・ワダ=マルシアーノ　映画研究，メディア研究

〔著書･論文〕 喜多　『インターネットの思想史』(青土社，2003)；『起源のインターネット』(青土社，2005)；「『社会的責任を考えるコンピュータ専門家の会（Computer Professionals for Social Responsibility)』の成立と発展」『史林』101 巻 1 号（2018）

松永　「キャラクタは重なり合う」フィルカル 1 巻 2 号（2016）；『芸術の言語』(ネルソン・グッドマン著，慶應義塾大学出版会，2017) (共訳)；『ビデオゲームの美学』(慶應義塾大学出版会，2018)

ワダ=マルシアーノ　*Japanese Filmmakers in the Wake of Fukushima: Perspectives on Nuclear Disasters* (Amsterdam: Amsterdam University Press, 2023)（著書）.;『＜ポスト 3.11＞メディア言説再考』(法政大学出版局，2019)(編著)、『No nukes：「ポスト 3・11」映画の力・アートの力』(名古屋大学出版会，2021)

メディア文化学専修は，情報・史料学専修と二十世紀学専修が合併することにより，2018 年度に発足した新しい専修です。この新専修の理念・目的を以下に紹介します。

現代はメディアの高速化・大規模化・廉価化・大衆化・グローバル化が著しく、文化や情報は短時間のうちに伝播拡散し、それにより国や地域を超えた新たな文化・価値観・生活様式が生み出されています。しかし、同時に従来の文化・国家・制度も存続しており、社会的規範や歴史認識などをめぐる新たな政治的・文化的な軋轢を生みだしています。

本専修では、こうした現代特有のメディアや文化事象にかかわるさまざまな問題を考察します。本専修の教育の大きな特徴は、従来の人文・社会科学の手法に基づきつつ、新しい事象を扱うためにこれまでになかった分析視点や他分野の手法なども積極的に採り入れる点にあります。そのため本専修では、歴史学・哲学・社会学・文学に加えて、マンガ学、ゲーム学、人文学系の情報学などの科目が用意されています。

本専修での研究テーマはジェンダー表象、視覚文化、ファッション、ゲームなど多岐に渉りますが、所属学生には各々の研究テーマに即した方法論を自ら切り拓く気概が求められます。

本専修のカリキュラムは，令和 2 年度より大きく変更されましたので，分属希望者は必ず専修のガイダンスに参加してください。

■ 現代史学専修

教　授　　小 野 沢　　透　　アメリカ現代史・国際関係史

教　授　　塩　出　浩　之　　日本近現代史

〔著書･論文〕小野沢“Formation of American Regional Policy for the Middle East, 1950 – 1952,” *Diplomatic History*, Vol.29, No.1, Jan, 2005； “The Search for an American Way of Nuclear Peace：The Eisenhower Administration Confronts Mutual Atomic Plenty,” in *The Japanese Journal of American Studies*, No. 20, 2009.『幻の同盟―冷戦初期アメリカの中東政策』（上・下，名古屋大学出版会, 2016 年）.「「同時代」と歴史的時代としての「現代」」『思想』No.1149 （2020 年 1 月，岩波書店）.

塩出 『岡倉天心と大川周明 「アジア」を考えた知識人たち』(山川出版社，2011 年).『越境者の政治史 アジア太平洋における日本人の移民と植民』(名古屋大学出版会，2015 年).『公論と交際の東アジア近代』(編著，東京大学出版会，2016 年)

現代史学専修は，1966 年に旧史学科の一講座として設立された，文学部の中では比較的新しい専修である。

現代史学専修は，「現代」という時代が，それ以前の時代とは異なる歴史的動態を有し，それゆえに，この時代を研究するためには，特定の国や地域を対象とする伝統的な歴史学とは異なる分析上の視点やアプローチが必要とされるという立場に立って研究・教育を行っている。19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて，アジア・アフリカ地域が欧米を発祥とする主権国家の国際システムに取り込まれ，あるいは欧米列強の公式・非公式の支配下に入ったことで，地球上のすべての地域が相互に結びつけられ，「ひとつの世界」が出現した。近代以前にも遠隔地域間の交易や情報の伝播は見られたが，19 世紀後半以降に出現した「ひとつの世界」では，ヒト・モノ・カネ・情報などの国・地域を越えた移動や伝播は恒常的なものとなり，その速度と規模は，21 世紀の今日に至るまで，様々な曲折を経ながらも増大し続けている。この「ひとつの世界」は，地域を越えた人や社会の連携や相互依存を促進する一方で，新たな分断や対立をも引き起こしてきた。たとえば，地球上のほぼすべての土地が主権国家と植民地という制度のもとに分割されたことによって，それ以前の人的・経済的な結合が断ち切られる事態，あるいは対立しあう「国益」を追求するために国家が人的・物的資源を大規模に動員する事態も，逆接的ではあるが，「ひとつの世界」が出現したことの帰結であった。現代史学専修は，人類の歴史が「ひとつの世界」の世界史として展開するようになった時代を「現代」と捉え，この「現代」に生起する様々な歴史的事象を世界史的な視野から分析し考察することを目指している。

現代史学専修の研究と教育は，分析対象の当事者や同時代の観察者が残した一次史料の精確な読解を考察の出発点に据える，実証的な歴史学の方法論を取る。現代史の研究では，オーラル・ヒストリーや図像・映像をも史料として用いることがあるが，それらについても，文字史料と同様に厳密な史料批判と合理的な解釈が必要とされる。本専修の特徴は，一次史料から得られた知見を，能う限り世界史的な文脈に位置づけて考察しようとする点にある。そのためのアプローチは，無限にあると言ってよい。たとえば，国際関係史や比較史のアプローチ，あるいはトランスナショナルな視点を導入することが有効なこともあるし，ナショナリズム，ポストコロニアル，ジェンダーなど，社会・政治・思想などに関する様々な理論を援用することで複雑に絡まりあう事象を解きほぐすのが容易になることもあろう。

本専修で学ぶ学生には，史料の読解に必要とされる言語を含む，複数言語の修得が必要とされる。卒業論文のテーマは，自由に選択してよいが，研究対象の一次史料を入手できることが条件となる。本専修は世界各地の現代史に関する多彩な特殊講義や演習を幅広く開講しているが，これらの授業だけで現代史のすべての事象や問題をカヴァーすることは到底できない。現代史を学ぶ学生には，他専修や他学部の授業，そして何よりも幅広い読書を通じて，世界史的な知識と視野を獲得するよう努めてほしい。